である。 本命家の「告白」 本命家の「告白」 はスキャンダルとはスキャンダルとは、関係者に値する書に値する書

.6 会にあ 望 0 世 ボ 1 5 0 TC 信じる諸原則 力 5 まで 感情に 特質 性質 10 Ł 私は * 律が は し私 幸 幸 C 0 5 無 は 支配 12 20 その 6 To エゴ る あ で T きですし 人を長 7 幸 心 0 0 さ 10 生きると 地が れるの 奉じる人 でも私は自己と闘 最大の ズム きな悪徳は 去に 悪 を満足させる 幸 世 として喜 があるとすれ 欠点は幻想を愛するこ は TC 0) 5 尊敬する 帰する から ことは 魂は C 5 す 持 民 0 2 能力と手段と不 T 著 嘘 で仕 ては ところが判 で 名 6 人は T す。 えず to 5 か 現在と同 な政治家 元、 ば、 80 5 5 と世 ませ それどころ C 自己にさか その < す。むろ 熱意をこ 普通 0 P L 5 エゴ 退転の 政治 異常 中全体を 5 12 私 静け 異常で ん私に B T 1 5 か公衆に 80 的 は ズム T 犯罪 5 12 意志をも な さを 0) 服 は n 自己愛が 不思議 H 12 は運動すると な L 野 人 2 左右さ むか を生 と運 重 5 n 心 2 ば す。 b 返す T なも な 2 を L と人 T 5 だ 2 T 6 欠 S n 李 何 如 る L 生を を至福 5 世 5 なら、 と、活動す カン to す 0) な 公的 T 2 T 0 覚悟は いる は私は で 冒 ろ絶 0 で 誰に す。 険、 10 0 n だとする to 話す 重 3 す 対 うち Ł 平部 る熱望 から 信念や だ 見 n は あ な 通 0 5 申 0 4 て私は 5 主 カン 理 せん 屈辱 確信 でし 書く 3 だ 事 から 2 幸 7 T は 7 から な 無 1 世 あ な っで 生 限 は とか 12 従 B x 私 r 1 2 る 知やかる基うの私 基 12 活 0 5 ざま 5 カはで す

自己を語

BIBLIOGRAPHIE:

- BAKOUNINE
 "Confession" 1854 T raduit par Paulette Brupbacher, Virage presesses universitaires de France 1974
- Federalisme, Socialisme, Antitheologisme.

 Interoduction de M. Nettlau, Edition L'age d'Homme
 Lau sanne
- Die Reaktion in Deutschland (1842) Michel Bakunin; philosophie der Tat, Hegner-Bücherei 1968
- L'empire Knouto-germanique et la revolution Geneve, chez tous des Libraires 1871
- Dieu et L'etat; ibid 1882 M.Bakunine, de la guerre à la commune, T extes des 1870-1871 etablis sur les manuscrits originaux et presentes par Fernand Rude, Edition Antropos 1972
- Le Travail (Catechisme Révolutionaire) extres de Ni Dieu et Ni Maître par Daniel Guerin, FM/petite collection Maspero 1970
- "PROUDHON" Extres de Bakounine, La liberte, choix des Textes
 Jean Jacques Pau-vert edition, 1969
- BAKOUNINE OEUVRES COMPLETES
 Volume I, II, III, Interoduction et annotations de
 Arthur Lehening, Editions champ Libraire 1973
- "Russian Revolution" extracted from "M. Bakunin to Sergey Nechyev"

 Daugh ter of a revolutionary, edited by Michael Confino,
 A lcove press 1974
- Michel Bakunin Selected writings edited & interoduced by Arthur Lehning Gr ove Press, Inc., 1973
- History of tthe first International by G.M. Stekloff, New York/Russell & Russell reissued, 1968
- Marx/Bakunine 1.2. Socialism autoraire ou libertaire, union general d'editions, 1975
- Michel Bakunin Frühschriften, von Rainer Beer, Verlag Jakob Hegner in Köln, 1973
- Bakounine, Le socialism livertaire, Textes etablis et presentes par Fernand Rule, Editions Denöel, Paris 1973
- Michel Bakounine ou le Dëmon de la Revolte, Archives Revolutionaire de Frit B-rupbacher, en-tradition Française, 1971
- Bakounin Roots of Revolu-tion by Franco Venturi, The universal Library 1960
- Bakounine et Marx Par Jacques Duclos, Edition Plon 1974
- Les Ours de Berne et L'Ours de Saint-Pétersbourg, Par Michel Bakounine, Editions l'Age d'Homme SA, Lausanne, 1972
- Lettres Inédites, Herzen-Ogarev-Bakounine, Interoduction, traduction et note par Michel Mervaud, Libraire des cinq Continentes, Paris 1975

す。他 レ難い の熱望はみたされなかった。この熱望が後にデモクラシーの高揚と結びついて私の唯一の動機にな 者のよ 果とい 中にはいつもドン・キホーテ的(要素)が多分にあって、それは政治方面だけでなく私生活にお 望です。その結果がどうなろうと、あらゆる抑圧に抵抗するのが私の神聖な義務だと考えます。私 あるということ、自由であるとは他人の自由の中にあること、こうしたものが私の信条、私の生 ました。この高揚につきもう少し言葉で規定すると、即ち、自由への の暴風しか追い 反省するかなりの余暇があったからです。そして今、私は自分を無関心に、あたかも死に行く者か死 終る、愚行によってではなく、不興を買って数人の敵を作り、それとて誰 あるのです。即ち、私は酷い抑圧は無論のこと、僅かな不正も無視できない。よく れた期間へ ブルジョワ社会においてのようなものではないのです。また、もし若い頃から、連命が私を水夫に カン もない 人の幸福の中に自分の幸福を求めること、私の人間的尊厳は私をとりまく人びとの尊厳の中 憎悪、しかもその憎悪は、抑圧が私にではなく他人に加えられている時一層しき烈になるの りにみつめることができるのです。 ような確 う訳ではないのです。陛下、私の無意識、私の罪と犯行のすべてを解く鍵はここにあります。 ていたら、今頃、私は多分正直者で、政治なんか考えず、他の冒険を追いかけ廻 一八五一年三月~ のに、 信と率直さをもって語り得るのは、この二年間(ビー けてとなかったでしょう。けれど物事は別の定めとなったので、運動や活動への 無反省のまま他人の事件にまきこまれ、生活にもまれて動きま 一八五四年三月>までの二年間の意…訳註)自己を研究したり、 ター・ポール要塞監獄に幽 愛、すべての抑圧に対する かに対し嫌悪を表明した結 (" 告白 , 一八五 わ やるのは何の権限 りそれ が徒労に 5 0 打 to 12 T 0 で 9

衆に自己を晒すことについ :: 私 は 言う 学者では なら ば なく、哲学者でなく、まして技能のある作家ではな 自分の身を守るた ての本能的嫌悪を屈服させただけだ。 めにそれをや った ことはない 0 2 い。私の して(今度は)熱烈な確信が 生涯において 書くことは

的にまた たは ある れに ると 道徳の諸力の完全な発展の中による刑事に解している自由は、真にその名称に価するの解している自由は、真にその名称に価するの 形式的 考えるよう 人主義者、 基礎とする誰 尊厳と幸福、知性の発展と向上が可能だと思うのだ。私の自由は、国家によって計量され管理される せる な本質の法則に な敵 有効 内 いる か、われわれ す 0 で下賜される自由 である だろう な Ļ 5 力の完全な発展の中に在る自由だ。その自由を制限するものがあるとすれば、われ てを公に、特権と利益を代表しながら、今日でも世間を馬鹿にし隷属させるよういつわりょぎけ からである。私は自由 な、い 理由とみなすのである。 だからそれら(制限)を一箇の限界とみるのではなく、われわれの自 70 利己主義者のくだらない寝言のような自由ではない、ましてやプルジョア自由此ゴイスト。誰かの特権でしかないのだ。私の自由は、ジャンジャック・ルソー派が公言す 固有で、存在の基部を成するものに他ならず、物質的であると同時に知性 5 各人の権利がゼロにまで引きさげられるような自由ではない。そうではなくて私が理 か? で、存在の基部を成するものに他ならず、物質的であると同時に知性的、道徳的の片側でまたは上から設定される制限によるのではなく、それら(制限)はわれ よって跡づけるしかないもの、正 わゆる何人の権利も国家によって代表され、各人の権利に限度があり、従って必然 私は真 りのは彼等は現在と過去を問わず、宗教、哲学、政治、法律、経済的社会的な 何が私をして今この作品 |ではない。さよりなものは永遠の虚偽であって、実際には多くの 理の熱烈な探究者であ いのだ。私の自由は、ジャンジャック・ルソー派が公言するような個 の狂信的愛人である。私の考えでは自由の環境においてこそ、人間 は、各人の潜在能力の状態に認められる物質的、 (" "," 5 しく言えば、その法則は外から誰か法官が設定す コミュンと国家観』…のこと訳註)を発表 秩序の党Vと称する虚妄の悪党共に対する執 由の現実的 主義諸派が 人の隷属を われ な条件 知性的 12 わ 個 0

い暴力 どころか や権威の 連帯による自由、平等における自由である。との力を理想的なものとしてか表現できな そとに自己確認をして無限な拡がりを認めるのである。すべての人による各人の ているのでは、各人の自由は他者の自由の前で、境界を前にして立ちどまるの 原理 から勝利する自由。天上と地上のあらゆる偶像をひっくり返し、新世界を樹立し ではなく 限定さ

変容によるか \$ 立 to 0) 7 てられなければならないと考える。それはコミュー より、またコミューンの下で自由に組織され連合した生産者集団の集約化した財産によって、打 べて、しかも 存在するすべて 国家主権の行使や保護によるものではないのだ。

(パリコミューンと国家の する目 考える能力は 無限に小 経 であるなら 厳、道徳性また個人の幸福更らに諸民族の繁栄なぞは嘘でしかないからだ。それどとろか白済的社会的平等を信念とする闘士である。なぜなら、との平等を除外しては、自由、正義、 田、それはすべての教会とすべての国家の廃墟の上に立つ連帯する人間性の自由だ。 3 徳性また個人の幸福更らに諸民 S 0 \$ \$ 人間性の第一条件として私は平等とそこの世界において、労働の自発的な組 の等、 のは、宇宙の無限の集体を構成する存在(複数)は、世界内に 中央は上から また接近しているか或は広大に離れていて 一族の繁栄なぞは噓でしかないからだ。それどころか自 ンの連合と自発性によって成るのであって、決

<存在>の本質

観念)

ち 織

集合力 T とりわ なら 想像力によっても ーツリ 幸 を TC われ れわ S。即ちそれ(集合力)は普遍 ける 4 :、不断の動と反動によるかは(問りことなく)只一つの運動に組みこまれ、わ れ 1) な不断の動と反動によっても予見されない 0 それらの性質がどんなものであろうと、質と量の関係に於て大きなも れは は諸君の随意 なくても、相互にまた個別が全体に働きかけるのであって、その働きかけは直接 の感覚に現われ ティ)とか、生そして普遍的因果性と呼ぶものを構成している。この集合力を神 未だによく認識され 12 で、 想定できるが、しか 、しかもこのもの(感覚)は宇宙の無限に小さい断片しか把握し われ関せずだが、その神にここで厳密にしようとする意味を付 ていない 的で自然で必然な組合せであるが、少しも予定的 ん決 。というのはそれは一集合力、生、普遍的因果性 して現実的 。この集合力は常に に把握 も、(それらは)欲 することはできず、 運動し活動的 の、中ぐらいの 存在する事物 に決定 れわれ で、 せずとも 2 0 1 から 0 0 P

即ち過 t 2 生じ 9 5 カン 域 で 的 る 2 なく . 配 のを恐れず言い得るのは、普遍的生が諸世界を創 現在 置を 的因果性を構成する活動によるしだと承知する。これら て一つの 決定 ・未来の一切を具有する社会を創出 よく判って し、地表を有機的生命の素晴しきも 結果(1)、個 いるの 别 は、 の諸原因すべて わ n わ n はこの の同 しつづけるも ので覆 時活 集合力を絶対的 出する、 動によって作ら S . の、それが普遍的生である。 更に人間 のである。 のことをとり決めた また第一原理 界 れまた再 を創 わが地球の地 出 生さ しつづける あ n T るも ではな と、誤解 質 的気候 0) B 0)

過ぎな 原註 5 す 0 ~ ての 個 人 は彼彼 0) 出 生を 宰領 し、その後 0) 生長条件 と組 合 しわされ る諸 原因の 結果に L カン

自 然 の法 訓

できくの顔と類を

ばし らを 題に ならな 先に、 浩 をかように理解した 或はよく繰返されるのを観察し、これを自然の法則と名付けるのである。 する仕 5 。現実世界内 5 で 方を完成するのだ。そして何らかの事象の秩序に 人間が来て 現在 ではすべての事象が影 、それらの では、先行 事象の意識と多かれ少かれ する理念、予定され、 響の結合と数知れぬ あら な 詳細な知識を考察して、それら(事 5 条件によって かじめ て、同じ仕方 構想された 作 りだ また 法 則 は過程が され、そ などは問 n

なも 念で 5 う語に 和 であ ない る。 ので よっ て、わ ある。そ れわ うで れ が理 は なく 解するのは、 て、 存在や事象ま 神秘的 たは先の理念を作りだ 理念や汎 神論的理念で です先行 \$ なけ する n ば何 現実 カン

た絶えざる創造の流れ

として

一度は認め

られ

た傾向によって

1

この傾向

は L

ば

L

ば繰返さ

n

る

te

なく条件や影響の結合によって、或

になったの

は、

カン

よりに規定した自然内において、疑い

-15-

象思考の関係とから出発する抽個別・具体性とそ

して わされ って事象を関係づけるから、われわれの精神による、現実的な事物の発展から分離りのはそれ(一定性または繰返し)はわれわれによって自然の法則として認識され る。既にダウイ 一定のものとなるし、言うならば、事象の決定された秩序においては、法則そのものが常に再生さ 物 1 できない 的生命にまで発展する多種多様性の種と類の絶えざる繰返しはそれ(自然の法則)によってしか い。そとでそ となり、 有機化され お H か例外と名付けている大きな領域を残しているー る実在 同じ の一定の過程にしか過ぎない… 。その一定性と繰返しは決して絶対ではあり 程度に固定され、 0) 人 れは 間 とされ、それ 精神が機械的、物理的、化学的、生理的法則と呼び表明し認識するの る単純細胞から始まり、 ンが良く証明して を作 事物の発展の無限の豊 りだすので らが 作りださ ある。 新 いるように、さようないつわりの異常性はそれらの間でよく組 らし い多くの 次 ということであ れ、言わば新らしい習慣的な過程、新らしい再生産方法 5 かさを囲いこみ、衰弱させ、解説する状態を示すだけ で初めは植物的組 種と 類を産みだす有機的生命を担 さよりな仕方は極く不当な言表であ 得ない。それ る。即ち、植物のみならず動物迄、 な事物の発展から分離し 成の変容をすべて経過して、その らは常にわれ る一般 b り道となる。と は、自然にお れが不適切 た抽象に外 0 規則 る。と 地上 や自 み合 であ なら 後 10 12 0 5 I 異 5

哲学的諸問題

#1

づこ < す 10 宙 n T るも で、従って抽象能力即ち、 0 を 表 説 象の す 0 次 ように、感覚機 こと)動物をとりまく現実的るには、宇宙の表象は動物に のように還元 たされる 能に直接所与されるの 人間にとってだけ存在し得るのである。では人間においてそれへ表 。何故、 な事物、 は存在 人間 L 12 ないと 宇宙 大き ではないから SP の表 いうことから始めよう。何故 象 の、小さいもの、近接して在る とそ である。それどころかそれは抽 の統 一理 念が 生ま n るの なら \$ 2 カン 0

性 一つ 量 0 た T 6 中心 。即ち 0) 12 Ó とし 用 T 関係 0) 中に転移するのが ゆ 李 在 0 個 2 T た同 はそれ 12 < る 無限定な並置であって、 0 别 のだ で区 され 0 働 一の思考におい か 自 る仕 * 分 ぞ カン 人間 され れが わら する は自 かけ 方に 個別 体的で現実がではない人間の思考である。 の認識力はこの抽象能力により た関係 己の思 外的にとどまっているの ず、それ つき検討し た吟味し てそれら 等 考 n らは によっ 0 5 集体ではない。で 多樣性、少 0 to 唯 てみよう。人間 を統一するの T 100 後、目ばた 12 の外 互の しも 在(物 のに統合した だと理解する。 規則 ě 統 で) であ は自 0 は 一の現 E ある うち 付与され、それ 集体はどこか L 5 己 0 り、混 関係が る。人 の周囲 わ 12 かよう かの 唯 -0 外 的世界 75 在 間 あ 表象 ら来る する はす 外的事物を 12 5 る 統 (認 \$ 0 一を によってそれら は べてと 0 ことなく、 \$ のだ とし 人間 知る 識力) は相 創 ろう 認め 出 12 よう T n とって、 5 L L 隣接す にな る。ま か か提示され の事物を順 互関係 外 ? 的 を 6 取込 主 世 無数 る to 人 や事物 界 間 0 ないの 0 4 0 0 7 To 次 多 思 事 あ 2 12 只 様 0 考 物 n 7

と形而上世界の単現実世界の多様性

一純粋性と形而上世界の

7 個の わ n 2 1 2 更 5 n 個 わ 存在 70 ことに ٢, 3 0 別で現実的 れの思考は 50 思考の 実証的な限度を構成するも より である。そこでとう言えよう。抽 なる だろう 0 か 統 によ な存在 b 0) 種 -く、更に か だ n 2 カの異 は具 ・そ わ 5 生(La vie n って カム n 5 b は 高く登れ、 遠と崇高 で君 事物を を構成しているも 象化され 12 代 は満足するだ って さを のし 取)はその豊饒 6 、それ 答えな か保有 込 上界を越えて しめば 元 象能力は T ろうか ぞれが にして H 上 0 せず、そ 取 方に さと壮 り込 すべて n ば なら 天界 ? * 共 也 種 \$ 大な 通して 程、そ から抽 々の事 の内容は 野 15 0 L 人 一過性 5 蛮 思 間 T 人なら U いる の抽 想 n 象化 物を わ だけ <u>ー</u>の 稀薄 は n 8 昇 \$ しなけ 唯 象 わ との質問 備 0 能力 を 中 12 0 なる。 n 抱 12 えて下方に L L 在る 表象に から H て、 か保有せ n による特異な所 抽象力 ばならない は答 5 遂に 2 象化が 0 統 と呼ぶも えるの 崇高 そ は 一するの ず、その 共通 な 0 L す 12 T 産 統 抽 1 L 0 一を 象力 多様 結果、 まり とし 0 当惑するだ 80 T だ ば 5 カン 現実 は 性 る 2 T 空 12 5 I 0 \$ われ 0 中 2 を 0 5 わ

しさを失う理由

君が かも 能力 ず、この宇宙 きるだろう T S カン L 5 つもわ て見る の天体とだけ の力によって れな の無 か? ととも 限定な宇宙の n い。それと言うの 々の現象を伴 われ は即ち現存する諸世界の全体性に外 ないだ の思考によって現存する諸世 、或はまたその他の太陽系中の無限定なものと…そのも の異る発現を示すも 君は更に高く、 統 ろうも った運動資料だ。それ 一を表象する仕事に はわれわ のと、…ただわ 君の太陽系を越えて、そして君の思考の れの思考は実に のである。しかしも 着手す 界 が光、熱、電気、磁 n の個 なら わ n がその る H X ح 0) 2 有限で終りがあるとは信じない 0) L 理 て、そ 存在を しどん 0) 曲 の特殊 によっ n 予 な限度の 気であり、今日よく証明さ を決 想するだけ な存在から て、その抽象活動 定し のを君は見た 前にも 中で、天空に輝 たり満すことで満足で 抽象化 なのだ たじ ことが ろが からだ。そし 加 0) して、例えば 限度 瞑 < な なく、 を 合 何 S n する 知 百万 7

5

思考 無限 高な てを 裸形と 越 0 定 所産で の存在 え、すべて そ、唯一・至上の存在にす ある。 即ち の現実的内容から解放されて外ならぬ絶対界に到達し、自己を開示するが、。それは(人間的思考の)抽象力として既知のものすべて、現存する諸世界 不動で空虚で絶対的 なように、宇宙の現実が な無1 それが 神だ。それ故 0 や、神は 絶対的 抽象で あり、人 世界 その 0) 間 す 的 崇 ~

るも た後 7 人 L す 0) カン で、 は べて つま 反論 れ感覚され な 重 現実的ル り宗教 た顕著な全能性が するだろう。先述で明ら は、唯一の運動に組み合わされ 5 b れわ :. 2 的 n 存在の絶えざる変容の 主張して るとしながら 哲学的 は少しも いるに メタフジックによっ 否 すべての事物を支配し、またすべての生きとし生ける存在によって多 定する 過ぎな 今に カン 0 なってそれを否定する 5 で るか、 はなく、た 計、またはそれらの 。われわれ て求めら 構成されるが が最 いととの れ、造られ 初に規定 現実的 意向が -統 それ す 一と普遍 べての な普遍 L る あるようなのはどうしたことかと こそ既述し たの 理想的統一の間には何 的関連性 存在の)絶えざる は、存在の無数の 的 統一と、抽 たように、 と因 果律を 象 の過 人の言 総 5 計、本 共通 程によ 用 規 と反 定 カコ L

一級等級 と形而上世界の単 受賞世界の多種整

えるも るも の計 言い 宙とは限度のない、初めがなく終りのない一個の物語に過ぎないのだ。 なら、個々の特殊的存在の絶えざる変容が個々の真実で顕著な現実を構成するからである。因って次のようになる。宇宙の現実的統一とはその現実的変容の関連性と絶対的無限定に外ならない。な 因果律の)は好ましくもなければ、確実でもなく、付言した多くの説明にもかかわらず再び誤解を与 りになっていると付言した範囲で、その側 (普遍的因果律の側) に何らの思考または先取意志、何ら て生産 対的 そして死んで変容することである。そこでよりよくわれわれの思考を厳密にするよう付言するなら、 的関連性の絶対的全能の環境または影響の下で無意識に、無意志に生産され、生まれ、発展し、生き 造されるも ようになる。宇宙の現実的 から区別するのである。ここで言明しなければならないのは、個々の世界、個々の存在は、普 の、個別は有せず、絶対的結果でしかない)のだから、ここで再認するのは、その表現(普遍的 画、予想、可能な予定はあり得ない、(それ自体は絶えざる自己実現の外に何らの存在、先行す 得るとすれば、この普遍的因果律によって創造された諸世界、そしてわれわ 第一原理としてではなく、それどころか、結果として、すべての個別的原因の同時的作用 され ので、そのためわれわれはいつでもこの創造の語に自意識のある創造者の理念を付けてその のの(結果)と理解するということである。かよりに規定した後で誤解を恐れることなく 再生産されるもの、その作用とそ厳密には普遍的因果律を構成するもので、従って常に創 または因果律であって、ここで言葉をつけ加えるなら、関連性として理解するの れが注意深くその 12 遍 被

んど何も知ることができない。やむを得ずわれわれは、僅かに太陽系を知るのみで満足し、それに はそうあるべきだとか、十分にそうなるのだとか、でなければわが太陽の世界は失わ って、宇宙 既にこの後者に就ては高度な機械観に関連させてよく知って居り、更に物理、化学、地質学によって 星は、宇宙 の広大においては不可触の一点を形成しているに過ぎず、わ の他の部分との完全な調和を仮定する。というのはもしその調和が存在 である。人 間は無限に小さい個別しか知ることができない れわれが注 。無数の光体から成る天上の L 意を向け なければ、それ れるからであ ても 低 る 1

は何だ われが

ろうか 進むそ

?

に、即ち

が何世紀かは

to

0

b

元

か?

どのよ 第一原

9 質

の目

低次 ついての細心で忍耐強い分析)を活用するしかないのだ。それによって外面的ではなく内面的 そこでとの二個の能力、現われでは相反する二個の傾向、即ち抽象と注意深い分析(あらゆる この世界、わが無限な世界を知るには、抽象だけでは不十分だ。それ(抽象)はわれわれを再 る…しかし敢えて言えば、われわれの精神は尊敬と愛をもって、細ごまとした の事物から高次の事物の秩序へ高められることがなく、そのため存在の自然的秩序は理解 、最高の存在、無の許へ導くのだ。そこでこの抽象能力を活用するにしても、それ 細な研究に没頭しなければならない。それなくしては存在の生きた真影が判らなく 無限に小さ なるだ がなければ できな 3 5 び神 5 \$

しかし純粋な真理と全体性は科学に依ってしか与えられないのだ。 供するが、また同じように一種の直覚的先見の明によって一つの蔭、真理の遠い面影を提供するが、 のは、感覚や想像力はわれわれに一個の像、この世界の多かれ少かれ虚偽の、やむを得ない表象をのは、感覚や が地球であり、ど希望ならば、わが太陽系を自己に形成することができるのである。そこで明白 わが世界の現実的な概念に到達でき、わが宇宙をわがものとする僅かにしろ十分な観念、それと

うく

固有の性質と役割、その独特な領域と舞台を知ることができ、さよりにして、盲目 生命発展の諸段階における機械的、物理的、化学的、地質的、有機的進化のすべてを知らなければな 自己を知ることもできないのだ。それ故、少くとも人間性に奉仕したければ、人は知らなければなら人間は自己を知らなければならず、また自己を取巻き自己がその所産である自然を真に知らない限り らない。即ち、その固有の出生と存在の素因と状態のすべてを知ることによって、地上に於けるその かないからである。人間は自己より低次のもの、先行するもの、同等のもののすべて、植物と動 に(事物の)並置と法則性を更に深く探究しなければならない。というのは人間性とはその対価でし ない、自己の思索によって可視の世界へ分け入り、基底を究めなければ止めないとの希望をもち、常 の打消し難い知ることの要求である。人間存在の豊富さの中で実現するために、既に述べたように、 必要物の一つだろうか?(ためらうことなく言い得るのは、人間に固有な性質を構成して の必要物の中で、真に人間らしい人間とし、他の種類のすべての動物から実質的に区別するのは、こ 心とは一体なんだろうか?(あの好奇心はただの贅沢、気持の良い暇つぶし、それとも人間に固有な 最も完成した成果である人間自身をも含む自然の秘密の探究へむかわせる、あのやむにやまれぬ好奇 人間をして、彼を取巻く世界の認識に馳りたて、疲れを知らぬ情熱でもって、この地上で最 の世界に、自由の支配を導入することができるのである。 的な運命が支配す いるすべて 後 物 0 0

無限である。万物の変容という寄る岸辺のない海洋の真只中で、瞬時の微細な存在、背後に未解の それこそ人間の仕事だ。その仕事は最も野心的な精神と心を満足させるに十分なだけ汲めども尽き

5

呼ぶ しか しか 8 現わ 満足 いるがー 誇ら 失い、それ自体が抽象作用で、全く不動の存在であり全くの無である。われわれはそれを絶対的無と 先づ生き生きとした現実的な事物のすべてから、可視的世界から抽象化することによって知るのだ。 仏教はその特異な教義とそれ故に数億人の帰依者によって理解されていない神のない宗教を樹立して 定である。世界に浸透しまた幾ら 容、始めと限度と終りない運動だと言うだろう。それこそ摂理の絶対性とは対立するもので、神の否 逆するのだ。そこに人間の慰めがあり、報償があり、独特の天国がある。もし君が人にその親しん 永遠と前方に未知の未来をもち人間は考える、活動する、自己の責務を自覚し、自由の感情によって することはなく、人間が自己の中にみつけなければならない。どりやって採し求めるのだろりか? いる思想や宇宙の現実的な集体について、実のある言葉を聞きたいと訊ねると、答は永遠と万物の変 しわれ 0, 動においては不動で常に自己同一化している。この神はわれわれが見る限り、現実的世界、少く れるのだ。即ち神はすべての創造の永遠な根源であり、原因であって、創造された諸世界の普遍 かに落着いている。それ故人間は自己の外にある世界を啓蒙し、支援し、解放し、必要ならば反 人間が獲得できる宇宙の一部分である世界には現われないのだ。それ故、神は人間 、宗教的幻想は最高の存在、即ち神と呼ぶのだ。 す べての タフジックの体系の中で、神は先づ何よりも至上の存在、永遠に先在の、予定され、自己 ない。それはそれ自体(抽象)でしかも内容から離れ、運動を奪われ、越えるべき何 われはこの不毛の航海の終りまで見てきた、人間の能力即ち抽象化活動は只一つの対象に 存在の根源的 な思想と意志であり、すべての存在に先行するものとしてわれ かでも発展した神学を持っているすべての宗教はーし (連合主義·社会主義·反神学主義) の外側で邂逅 かし少くとも われに かを

…神の存在は人間の理性と正義の廃棄を要請する。 だけでなく実際に於ても奴隷制を樹立するのだ。 それは 人間 の自由の否定であり、必然的に理論上 (同書)

なく、 るのだ。神は存在する、それなら自然法がなく、世界は混沌を呈する。(ところが)世界は混沌では である。神の存在は自然法の否定としてしか価値を持ち得ない、そこから否定しがたい矛盾がでてく …神が論理に反しないと言うのは、神と論理の同一性を確認することでしかない。つまり神が論理 ならない それ自体で整序されている、それなら神は存在しないのだ。 こと。従って現実的な事物の流れと自然な発展がある。従って神は存在しないということ (同

しない。 は然法は存在しな はなら神は存在 しない。

論: な過程で、それによって多くの決定因子が事実を作りだすのでは の公理は単純であると同時に確定する。すべて自然であるものは論理的だ、またすべて論理的なもの 発展の中でし 現実世界において実現され、或は実現するのでなければならない。 とは何だろうか? 人間社会の自然史の B しそれが事物の流れと自然な発展に他ならないとすれ 中でし 実現され、 実現するので なけ ないだろうか。そうだとすれ n ばなら 即ちいわゆる自然とその後の ない 0 ば、 或はま ば、こ た自然

きだ。 実世界に実現すべ

父母 等の 0) すたア 自 ならなかったと理由 由 の不服従がわれわれを解放したのであり救ったのである。だから神話的に言うと、それこそ人間 原父母が従ったのだから人類は最も酷い隷属に服しつづけたことになる。だがこれに 0) 4 原初行為であ ムとイヴの原罪の話だ。 2 づけるなら、それは た。 知識の樹の木の実の食 神の側に 恐るべき専制主義の 2 たのを擁護するのに、 行 為があ 2 たので それが主の意志に ある。われ (同 相違して原 書)

1 くてはならないからだ≫それこそ安全弁なのだ> し神が存在しないならば、創らなければならない。何故なら知っての通り≪民衆には宗教がな

よって終る神秘なア

みな

は一致してヴォ

ル

テー

ルの言葉を繰返して

5

る

-23-

-22 -

神によって始 あし ならな して幼稚な幻想をしない 存在するなら、人は奴隷である。ところで人間は自由になることができ、自由に まり、神によって終る神秘なアルファベッ で、自己の自由と人間性を勇敢にも放棄する人びとに(私は トの中で生活する人びと、神を崇拝はする (言おり) な 5

故に 神 は 存在し な

5

0

V

ルテー 間 ルの言葉を転回させよう の自由 を愛し熱望する者として、人間性を愛慕 し尊敬するの が絶対的条件だとする私は、ヴォ

1 し神が存在するなら、それを 廃絶しなけれ ばなら な <>>

2 家)

à

幸福 田下 いの

自 II 0

を求め した ず、つづい 3. 限り ず、彼等の意志によってしか決定されず、またその結果先づ自己自身に対してしか責任を由はすべての成年男女の絶対的権利であって、彼等の良心と理性に於てしか、その行為の とする て彼等の属する社会(集団)に対して責任を負うが、その場合は彼等が自由に所属を同 負 承 b

絶対性

のだ 由では 人 4. なく、 CX の人は 2 人 の自 ない 0 自 地上で最後の奴隷だとすれ 同じだけ自由な人びとの下にあって真に自由であり、今も し、(人はそれによって)他の人びとの自由の中に自己の自由の無限の拡がりを 由 由が他の人び な意識によ との って、あたかも 自由によって、制限され ば、それは人間性の原則に反するだけでなく、 鏡に映しだされるように、自 るとするのは真実ではない。自 由に し人間の称号に過ぎない自 認めら n な けれ 己 0 ば本当 0 自 確認 由 曲の する 曲 12 自

自他私私

自由の確認松=我松=我

な 5 な 5

自 2 0 実現 n 200 Œ 各 義 人の自由はすべての人の平等に於てしか実現しない。権利及び実際での平等に C あ る 0 お H る

を と 尊敬する、 それが から 100 義務だ。彼を愛し、奉仕する、それが徳だ。 教義、只一つの法、只一つの道徳的根 本がある、それ から 自 由 だ。隣人 の自

(革命 家の教理回答)

自 放

: は 反 逆を めさが 本 世 自 、その心に熱烈な炎を伝え、誘引し、目的の達成に向けて必要な手段を創出させる。自由 曲の 0 母 情熱である。人間 とし た悪魔的否であり、神学的諾とは絶対に対決するものだ。 0 心の内 12 極く生き いきとした、 現実的なもので、眠 れる人 びとを

的解放 2 5 1) アでは る の情熱だ。 。そこでもり一つの別の情熱 ― 同じく正当で強烈なも 他 のどこでも同じく、この情 熱(自由の意)がプロレタリアート大衆の の一と同化している。それは物 (ジュラ連盟の同志達に) 心に隠れ

でもの大

わ 0 n 0 か Ļ ではなく、 はの 5 補え慣れ ろん 5 5 現実/現在 C だ。 12 あ わ れわれ を信じ 死ぬ る 過去の世代の生を知 その人びとが幸 なら が最強意に執着する L 75 て人 いし、 か 正義が 考慮しな 性の永遠 虚構は作ら その 5 福 b 人 で自 たい 0 45 との死後 曲 0 理 な わ と思う、 は 念とい n になるのを 5 にと 現在の わ また未来の世代の生にも 5 n 0 に勝利する わ て、 ようなも 移ろい 見 n が興味 失わ た S なら、 n 0 行く世代、そ 0 では を持 だ。 たものは帰ら なぜな 遅きに失っしたと悔まなければなら なく、人間 2 ている ジュラ同盟の同志達に《) らもし 0 非常な興味を持ってはいる。 人間存在の現る人間性とはは ない失わ ためここに 存在の その 人 n ハびとが不 実的ル 抽象 生き現実的であ t \$ 的 0 な集体で だ 何 幸と かつ実 あ

王 反 逆

で 0 織 あ 0 慣常 る \$ 12 抑圧さ のがあるだけ 的技術、反逆を勝利せしめるも れ 支配され搾取される大衆にあっ だ。聖反逆だ。(la sainte revolte) 0 それこそ自由の現実的な実際において重要な歴史的条 て、政治意 20 識 となるの あらゆる自由の母、 は何だろうか 反逆の伝統、 ? それは 只

互 5 5 征服と服従ー大衆を従属させ征服し搾取するものとしての国家を組織することである 背馳 政治 7 する は、これに反対し 意味、そして 0 二語に 200 7 互 T 5 みるならば、 12 国家に対する反逆を意味する。 対抗する二点のあることが判る。(特権)階級の視点 その原初 か 5 また歴史の その究極は国家の破壊だ。 展開 を横切っ て、 から か。大衆の との二点 では、 対照

は対極的に相反していると思われる。

ないとい 位を す り、悪く べて な 主 下げる能力や習慣はない できる。人 人 0) 5 5 4 取扱われて 断言するのだ。 とであ 取 精力及び 者 間界に於てと同様動物界においても、服従やあ 0 る。 < ない びきに って 較的 反逆、そ 限り、その隷属の (と言える。) そこで私は、 な尊厳性は、その保有する反逆本能の強度で計 L れこそ生の本 るの 国家の 地上 くびきに対 原因に依るにせよ、幾ら のどん 態だ。踏みつけられれ な民衆に 少しも この地上で歴史の初めに きらめ せよ、 反 逆し 本性に 程愚かでだらしのない、最も品 ばうじ虫でも カン でも反逆を 2 られる よって た、 そ n 於 抱 と一般的に 反逆する。そこ < (反マ て、 かな 程堕落した民衆 6 征服 5 民衆は N クス) 者、 5

矛盾に就いて

要な 高峰 す だ …矛盾とそ な カン の実践世界を構成したのだ時代)精神として彼は既に ら、この事実によって、彼はまた現代文化形成において で、 カテゴリ 0 それ では 、実践 一面的な なく、 0 しかしことは 0 内在 完成 的自治精神の 1 だ 理論形成 は一個の から、へ (質)の 一般にあ 2 1 独自の 発展が全へ1 0 n 源泉及び新 を論じる場所で だ ゲル 6 ٥ 理論の 確か は無条 0 12 幸 世界 上にあり との te で生まれ 理論 ゲ に現代 ル体系の結節点である。そしてこのカテゴ 実践 既 は 0 神 たの 存の諸 ない 完成契機 として、それ 1 の最 で カン 論未だに ら、矛盾の論理的性質を究明し あ で 理 の哲 の自己 論の 0) る。矛盾は ようなも 形式的 彼は理 必然的 を通し 一学者で 解体である 自己解 てこの す 論 あ る とし べて 0 用 っまた や伝播に て、理 体の創 カテ 0) 5. にあるが ゴリ 1 から 始者であ 5 0 I T 1) を概念化し 50 理 自出 2 1 ~ 論 精 ح る。即ち で が現代の にだ 神)の \$ L か から あ to 5 る H 0 出 to 0 T 0

教えた一文である。 教えた一文である。 本を援用しながら弁を援用しながら弁を読者の美的快感を読者できた。 論

方的 性質 して のとして存在するのではなく、そりした全体性としてあるのではな えるべきだと言うのである。しかしことで困難が始まるのだ。矛盾は実に真理であるが を取りあげるのは一方的で真実じゃない、だから真実であるためには、その全体性におい 包括(者)は全体的で、絶体的で、すべてを含む充実に他ならない 性によって、または一方向性に必然的に結び合わされ 実際にどうなるか視てみよう。 定)を母性愛的に妥協させる方法を執るだろりしそれこそ妥協派が全努力を傾注する所である。では 体性は裂け目に先行するものだーがそれは不可能だろう。何故なら不可解は の相互排斥 おける裂け目 である。 接近することはできない。なぜならそれ(矛盾)は否定であるだ あって、そうでなけれ weil der unfatzbare einmal unfatzbare ist>何故なら矛盾は直接的に、裂け目として存在するの へである に頭在化する。即ち、肯定と否定がそこに在るのだ。そしてそれらは相互に排斥しありから、そ の、隠れた全体性であって、また肯定と否定との、二部分 7. 0) 一方向的部分の一つを抽象的に理解するのを禁じ、二者をその必須の合体に 即ち、全体性の真理としての矛盾は、単一性の分ち難い一つであり、ま 全体として理解するよう求めるのである。彼等は矛盾こそ真実だ、対向する部 カコ 自体は、二個の一方向的部分を包括し、全体的で絶対的で真実である。だから人は ある。人はあの裂け目から任意に抽象化して、矛盾の単純 がその(矛盾の)本質になるのだ。では矛盾の全体性とは何であろうか? 5 である。故にそれ自体では潜在 実にこの単一性が隠れ ば存在 しないからである。さもなければ人 ていることによって、矛盾 し隠れているから、ま ている皮相さや貧弱さでもって、それ(矛盾) の相 は、あ は たそのように 容れない裂け い。そうではなくて からである。こ H な全体性に遁げこむかしこ その二部分 でなく肯定であ の対向する やはり不可解だ またその(一つ)中にけ目として存在するの して初 の裂け目 お が妥協派 部分 いて、不可分に り、また そこには二箇 めは不可解な 分 とし (肯定と否 それ自体と て矛盾を把 の一方だけ さようなも から て、 この全 一方向 12 0) L

定(派)は先づ安定したもの、不動のものと思われる。つまりまさに肯定であるからして、その

すので、自壊することになる。 安定によって、それ自体否定に対向するものとして、否定を締め出すだ。しかしこの締め は一個の運動である。そして肯定は実にその肯定性の故にもはや肯定でなく否定である。その内部 体で安定して居り、その無関心な自己充足には否定そのものを含まない。ところが他方では正にそ 絶対的安定で、否定に対してだけ絶対的に不安定な肯定になる1肯定は内面的にその生命決定 は、運動における反映とも分ち難い。或はむしろそれは一つにして同じ反映である。とすれば肯定は、 その 中に何の T てそれ(肯定)が否定を締め出すのだから、つまりそれ(肯定)はそれ(肯定)目体から締め こて、否定と関係している。そこで肯定は否定について二重の場を持っている。その一つはそれ 設定されて 内面では運 除魔物も含まないから、また自己の内に否定すべきものを持た いるから、それの内に絶対的な運動喪失を反映している1だが運動喪失におけ 動がない。運動とは否定である。だが肯定はさようなものとして、運動喪失の ないからし正にそれによって 出しの行 (要因) る反映 \$ 00 8 為 0) 自

らず、またどんな働きをするかも知らないのだ。彼等は否定を否定すると信じている 否定さ 自体では安定した方向を示し、その限りでは肯定的である。つまりさようなものとして肯定によって 否定の優越であり、干渉契機である。否定は肯定自体の生命を決定するものとして、それ自体(否定それ故、肯定と否定は妥協派が考えるよりには同等ではあり得ない。矛盾は平衡ではなく、むしろ ねよう。君がわれわれに理解させたのによれば、否定はそれを抽象的にみる限り、肯定と同じく一面 自体)の内に矛盾の全体性を含み、同じく絶対的に(肯定と)同等である。とすれ 向けて安定した指向を有するが、さよりな論理性と聖なる仕事がありながら、それ自体は なんだ。だが私は否定の現存を言ったのであって、その否定とは肯定から締出されたもの だ、それならそりした悪しき存在(否定)の伝播は全世界を稀薄化するのではないだろりか 否定によってそれ自体が肯定になるのだ。つまり彼等は否定をその凡俗的な安らぎか 、そして徹底した肯定を成就するのだ。しかしその中において否定の存在であり、自 ば人は多分私に訊 が、む ら眼覚め ので、それ しろ反対 それを 己否定 ? ~

ーそれ T (否定) はそのように確定しているのではないからし彼等は (否定を) その天職へ連れ戾 すべての肯定的現在を、たゆまず容赦 なく破壊させるのである。

否定さ ものは し愛をもって屈し、さよりにしてそれ(肯定)を吸収するから、この宗教的、信心深い れば、(肯定と)同権だと承認しより。だが否定は決して我執的ではないし、それどころか肯定に対 ではあるーが の潜在 猾に かな訪 動において(否定は)無尽蔵に未来を妊んだその性質の深淵を呈示するのだ。肯定は 否 何だろうか? それは否定、破壊、肯定の情熱的蕩尽である。むろんそれ(肯定の…蕩尽)が れ、否定は翻って肯定によって否定される。では両者に共通するもの、両者共に重ね合 するのを示すもので、その精神は破壊の嵐を通して罪深い妥協派の人びとに悔い改 定の装 n 、真に劇的で普遍的自由の人間宗教 は肯定と否定につい さようなものとして絶対権があるとしてもーそのような行動が矛盾自体の中に実践 の下に隠れて行われようとも…である。ところでこれらの容赦なき否定は否定の権 て、否定が安定し我執的に自己の方向をもち、自己に忠実でな にお ける秘やかな啓示を告示するのだ 否定に 破壊の めとそ しわさる 躍動 t って 的 Ł 利 的

純粋な火によって、肯定を自己のりちに不断に燃焼させるところに生じるのだ。 に個有なまた全体的運動でありエネルギーだから、他の方法で和解させるのは任意 で道徳的になるからだ。矛盾は全体性であり真理である。し妥協派だってそれは承認して 人が他の和解 肯定の が全体性としての活力であり、すべてを包括するその活力は、既に見てきたように、否定す であるかのいづれかである。なぜなら人は(時代)精神を受入れ かよりな自己解体が肯定と否定との唯一可能な和解である、というの 法でやろうとするなら、その人は時代精神に浸透されてい ない それ はそれ に浸透されて、真 のであって、愚 でしかな とそ矛盾その いるー く、ま カン なの 10 L 知

の活力は妥協派の人びとの半ば無能な魂とは妥協できない実践力をもって居り、またその為、そ るが、それから(矛盾から)運動や活力それに魂を奪りとか奪おりとするのである。といりのは矛 ところで妥協派はどういうことをするだろうか? 矛盾の全体性についてはわれわれと同じく承認 n

だ。つ 協派の なの すべて なるの 9 自己の活力を構成し 性ーそれ (活力)を駄目にしようとする試みに打勝てるのである。 肯定(派) もこれまで見て よう のを で まり 放棄するのである。 あるーそして妥協派が禁じるのも実にそれである。その結果、奇妙で不可解な災難、ま 0) だ。否定のこの活動に対して、肯定(派)は打ち勝てない に、それ 生きとし生けるものの中にあり、それが生きとし生けるものの存在を正当化し、活力の特長 が無条件に決定的に排除して、その活動を保有するならーそれ(肯定)は実際には否定性と 々が実際的原則を欠き、実際に無能なところから生じる全くよく理解される災難が生じるの 妥協派は だけでは正当化され得ない。それ 肯定の中に、既に自己のうちにも死んで腐った、破壊するしかないものを承 ているものを拒否する。即ち否定と闘りこと、自己のうちにある矛盾の存在と闘 が安定を否定する限りー自己につい が、それこそ矛盾の克服し難い て否定する方向 きたり述べて たは妥 力 から

えば、わ するん か? むちが などは ように T 当然である。この不条理なロココ調の 妥協派は肯定派の人に向 会の 12 あ 存 崩 なくちゃならな 期が悪 れわ 故ってその遺品とい かな席を与えてやり給え。君の歴史博物館に何 在せず、あ n TC は、それだけで絶対の真理が備っているようなものなんだ。だが何をすれ れも君 かも日 魂には良い空気があるのだがーで結構快適に生きている。ところでわれ 1定)が いよ。われ等の共通の敵 るの の世界 毎 5 に強力になっている 。だからと言って諸君は狂信家になってはいけないの は永続と不動性が真実と聖なるものの尺度で、それは丁度シナで官吏と竹の だ。と で楽しく って言う。<諸君! うのが貴重だとしても、い 5 9 やって のは 世界ーそこでは肺病人の身体にはうま小 1 あ から、彼等によって破壊されたくな 否定(派)が いる。その世 0) 人達 諸君が慣習とい (否定派)は 界には かの遺品を置 づれ崩れ去るものじゃないか? 地歩を固めて 理性や人間の意志による理性 抑制 う腐って色あせた安定を認 いて君達から継 を知らない いる。われ だ。あの人達 かった 舎の空気がよ し、われわ われは恐らく 承する ら兎角気にかけ ばいいん われについてい わ ことに n れ 的 5 に君達の を軽蔑 諸君以 だろう な決定 と言 るの 5

用 まるんだ。何故って、結局あの人びとは(否定派)若者達で<貧乏で気楽な状態じゃない し給え。諸君があの人びとに与える名誉によって、彼等は君達の社会でおだやかに分別をもって 騒ぎを起しているけど、それといりのは社会の中にちょっと重要で居心地の好い 坐り から>喚 場所が

るようには征服できやしない、諸君だってそれ \$ に固執するのは判る です。でないと世の中での君の居場所をすっかり それ いて、人生には応用できないのです。人生にはある種の折衷主義が必要です。世の中は から妥協派は否定派に向って言うのだ。<諸君の努力は立派です。わ し、同 情するのですよ。だ を作りあげるんだから何かを提供しなくちゃいけない が信じて欲しいね。純粋原則というのはそ 駄目にしてしまりのです。V れわれは君達が純粋原則 諸君が考え の純粋性

系ポー これ であ され る 000 たのである。現代はソロン ランド人)はボーランド人とロシア人の双方について働き、しかも双方からくびり はユダヤ系ポー 不幸な人びとは外的な和解という不可能事に苦労した。そして全くその為に双方から軽 ランド人の挿話を思いださせて呉れる。最近のポーランド戦争で彼等(ユダヤ 0 立法を適用するには余りにも悪くその力もないのだ! 殺され te 0)

きな ない n 人達を分別のない無節操な人のように言う! しかし私がどうしたというのだろうか、真実でしか 言った)現実性なのだから1各人はこの現実世界において現に在るものとして、現実的な存在である が外在 \$ れは言葉だけだ、と人が言りだろう。妥協派だってみな立派な知識人なんだ。ところが ものと承知している。その内面性が個人にとって無限に価値あるもので、1世界にとっては、 を 化する限りに於て、まさにそのようなものとして外在化するのだが、その限りに於て一人 ? からとて、私が黒を白と言いくるめることにならないだろう。 私は誰も攻撃しない。個人の内面性は不可侵の聖域であり、その不可計 君は、そ 判定で

行動におい 程、と人が私に反論する。あの人達の努力が君には黒または多分灰色に見えるのだろう。だけど ては注意深く、世界を破砕しよりとする民主党員なんかに比べよりもない位よく やっ T

にな を奪 だけ 現実の 体性、何とみじめな精神を満足させる全体性であることだろう!(彼等は矛盾から動的で実際的 しく認めてやろうょ。あれは漸次解体させるんだVそれから否定派に向っては<老人を解体し んだ。ところがわれわれは選ばれた者で、全体性を眺める立場にあるんだからね>何ん る。これが \$ を与えるの る よう 0 自 徳な人びとである。左様、彼等は自分で道徳的だと賞揚するが故に不道徳である。何故なら道徳 たら(矛盾)を理論的玩具として扱うのである。彼等は らず、活力の 5 ど今すぐじゃないよ。まだやって貰りことがあるからね。老人なんていつだって一方的なものな 。そこでこれ迄にわれわれがみて来たよりに、妥協派は進歩を企図しているのだ。だがわ C てき 存在 الر TI TI たのは、 まるに 進歩だろうか? 彼等は肯定派に向って言う。<年寄りを支持し給え、しかも否定 だ。そこで矛盾の解決の代りに、一つの は不十分で困憊的な状況、終りのないいつまでも漸次的なものを支持しようと望むのでは不十分である。 わが時代が矛盾の時代であることだった 、解体運動の創造的未来をはらんだ原理を窒息死させよりとするのだ。それこそ見 という唯一教会以外にありようがないからである。……… ある人なら顧慮することなくそれに屈し、それによって生きつづけるのだが、彼等 支配し処理できるとするのだ。現代の偉大な矛盾は彼等にとって現代の実際的な力 実際には彼等はわが不幸な現代という、あの生ける原理を窒息死させる以外の 肯定的で有機的な現実で矛盾を包み、その 1 つまり彼等は 現代の実際精神に浸透されてい わ れわれ に一つの悪しき分裂状況 とみじめ ない I 派 中 な魂 な全 故 5 も等 で てき 12 あ 0

る。 ある存在は、その外に自己の否定をもつからではなく、自己の内に潜在的生の条件(否定)を有す な組 合せによって、初めて視覚は可能になる。ところでヘーゲルの偉大な功績は、それ ち完全な光の下では完全な闇の中でも同じよりに何も見えない、それ故この二つの どーと人が私に言う。君は和解しがたい極端に、シェーリングとヘーゲルが既に否定した抽象 点に帰着しただけじゃないだろう か? 君が高く評価するへ1 ゲルは全く正当な観察をして ぞれ もの の現実

そ 度、こ で る 2 n 14 世 同 あ じと 界 6 0 45 5 た 0 で てど プ 訳 源泉だ とが 君 80 は は 2 次 口 で、そ て矛盾が う答 プ 性 テ 0 歷 から ス 2 自 史 口 た。あ えた テ 中 O) 9 0) 由 ス そ 中 絶 > 0 全体性に で繰返 カン 9 0) テ 初 L > 1 0 は て、教義 80 よく 原理 ズ 12 性に 4 お 既 している が 知 を から 5 12 て、それ 名 おい なけ 存在 漸 0 2 T 次現わ 乗 しての自 て提 n 5 0 L ば、カ 7 T 例示すれ る筈だ。 を裸わ 5 示されたのだ。そ n 5 由 てき るのだからし た。 の原理が トリックは それ た。そ ば、教義 な契機として保 50 自立 0 出 原 IV 運動を喪 としての自由 91 自は n 的 理 な独立 は、カ カコ がそ らは諸 カト 有 した 失した筈だ 0 IJ L 1 君! 期間だ 時 " IJ 0 た原理にま ク自 原理 代 ッ 7 0 諸君の は、 妥協派に対 体 VT 12 カン らあ 0 つづ で高め 崩壊 富 方が 12 5 0) TI 原 あ た あ L よく 5 5 た 0 のだった。 理こそ生命 た。ひ ゆる n 力 協 る 1 知っ 力 異 リッ T 2 2

クー = V は 20 後 3 1 9 パ 0 至る所に矛盾が露呈 している のを 例示し革命を 語 る

5 P 諸 君! 革命精神は 打 破ら n た 0 では TI 50 そ n は 初めて 0 出現で全世界を根底から揺が した

主 益 3 3 李 ラ 2 2 が 7 n る T ウ 1 君 な 2 0) は 5 ス 12 る 世 づ 7 界 体 立 か 0) か を から P 2 T * わ 1 生 和 知 き長ら らず る 5 I 解 T た だ な ル 12 N 多 だ 0 5 否 " 充 < 0) 5 カン 定 T 1 T 0 の精神 ね? いる 2 語 ブ ゲ n る ル カン から は N どら から 1 見 0 深 1. 0 浸透 だ 表 える 1 1110 1 0 1 カン 現 " E 文学、 周り L ウ を 1 T エル 3 借 2 L て呉れ を見て 5 b T 5 を読 るな る 書物、 再 0 きなか みる ら、地 肯定 だ。 給 教 誌紙 え。 的 だ が . 政 0) 2 君 下 0) 5 は 12 す to 治 0 5 君は べて、 0) E 造 否定の原理 的 1 2 0 カン . 和 社 ラ 原 ね 散起派 解と平 会的 て古 0) 皆 I を の手に 0 9 地 間 5 屈服 12 和 0 カ 盤の 作 を説 ٢ な 品 あ を IJ 上 6 ある < 語る C あ ッ 12 す 7 L 1 b ら好む とプ ある っそ た す カン ね 0 ? 品が 27 君 n だ П から テ Ł は 好 握 無 ス ス

D 15 1 1 T 12 = to 2 7. 1 2 9 0 後、 暗 实 を ブ 語 U 6 V 4 結論 1) T す 1 る 1 から 遊湃 Ł L T 生起する予慮を述 さべ(一八 四二年 0 時点)

t n を カン 5 カン 信 V. 5 頼 3 L 12 世 1 向 派 5 2 T 対 5 言 を L 0 \$ T \$ 駄 5 0 目 は 若 君 12 < す 0 3 理 5 心 恐 12 0 0) \$ 怖 向 B 生 カン 2 を T 重 5 自 心 n V 曲 を to 開 ば 12 死 なろ 者は V か 9 5 0) 死 1 しき盲目 あ 者 と言お を 0) 精神 L T 9 的 を 崩 な知慧と敵 80 n 3 た廃 せよ。そし 城に求 意に 満ち T 80 T あ 元 は 0 知性、 5 -否 H 定) な 5 を

だ点う創総の矛盾での造破精盾 でのが、一個である。 かとを依辞

いの拠は よのと後した遠

考B えののこ

0) わ B n L n 生 は V 遠 \$ 0) 0 神 測 を 6 信 頼 5 I 5 0 7 造 2 0 2 泉 す で ~ あ T る を 破 壊し 破 無 壊の 12 熱望 -1. は 80 1 同 る じく ッ から 12 お 創 H 造 方 る 0 7 熱望 反 は 動) す な ~ T